ヒバクと健康 LETTER 通巻 38 2020-12

2020 年 12 月 15 日号

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト
http://hibakutokenkou.net/

9.30 パリ発 19 時
10.1 羽田着 13:55
10.2 コロナ自主隔離開始
10.15　自主隔離終了
10.16　羽田 9:20→**高知・黒潮町**で「我が友」・シンポ
10.17　高知 19:55→神戸→大阪。
10.18　**大阪**「我が友」。小出氏講演
10.19　大阪→伊勢市
10.20　**津市**「我が友」
10.21　津市→ローカル、新幹線→東京
10.22　渋谷ユーロライブ　「記者・試写会」取材受け
10.23　東京→JAL 青森
10.24　**青森**「我が友」
10.25　新幹線青森→**那須塩原**「核の大地」小出氏講演
10.26　福島調査　**福島**「核の大地」「我が友」小出氏質疑
10.27　予備日　10.28 取材受け
10.30　羽田 10:55→パリ 15:40 着

表中、「我が友」は映画「我が友 原子力」
「核の大地」は「核の大地 プルトニウム物語」
地図中の点は主な都市

特集

パリから**渡辺謙一氏**

「核映画」たずさえ

ニッポン 10 日間

かける記 2

ビキニ平和活動家の山下氏に

「高知県文化賞」 12

10.22 プレス試写で渡辺さん

原子力映画　日本上陸かけある記

Covid-19 対策で国境を越える行き来がままならぬ中、なぜこの時期を選んだのか。振り返ると妙な偶然の出会いも含め、あっという間に駆け抜けた 10 日間の巡回上映でした。

◆検査

パリから羽田空港に着くと入国審査の前に、抗原検査場で唾液採取し、結果を待つこと 45 分間。呼び出され、窓口で陰性証明を手にして入国審査、通関を終えて空港を出たものの公共交通を使うなとのお達し。目的地までの移動は自努力、翌日から起算して 2 週間の自主隔離という条件もちょっとした覚悟が要りました。私たちが直面しているパンデミックとその対策、行政手法そのものが民主的な社会かどうか試されているようにも見えるのでした。

2020 年 10 月私は巡回自主上映と称し、新作と旧作 2 本の原子力テーマ作品に自分の手で字幕を入れ、自らのパソコンを手にして高知県黒潮町、大阪市、津市、青森市、那須塩原市、福島市の順で現地の NPO が主催・準備した貸しホールなどで上映しました。2 作品はいづれも独仏公共 T V・ARTE（アルテ）と私の所属する制作会社の共同制作です。

新作は、2019 年に撮影・編集し今年年頭に放送準備を終えた、“我が友・原子力放射能の世紀”（57 分）。もう一つは 2015 年秋に独仏アルテで放送済みの“核の大地・プルトニウム物語”（84 分）です。“我が友・原子力”は 3 月の放送を想定していました。が、Covid19 の感染防止ロックダウンでプログラムが大幅に変わりヒロシマ・ナガサキ 75 周年特集の枠で、7 月 28 日の放送になりました。Covid19 による暮らしのモードの大転換の中で思い立ったのが、この巡回自主上映でした。

2 週間の自主隔離を終え、初日に選んだ上映場所は高知県黒潮町でした。高知県の黒潮町、宿毛、土佐清水、足摺岬一帯は、“我が友・原子力”の撮影地にもなったので地元の方々にまず見てほしいと思ったからです。この地には多くの南洋マグロ漁船の乗組員がいます。問題が発生したのは 1954 年（昭和 29 年）のこと。米国の水爆実験が、マーシャル諸島のビキニ環礁で 3 月～5 月に 6 回行われた年でした。3 月 1 日の水爆実験は爆薬換算で 15 メガトン＝広島に投下した原爆の 1000 倍という威力です。爆心から 160km 付近で操業していた第五福竜丸の乗組員 23 人が放射

性降下物（死の灰）をもろに被り、2 週間後に乗員が急性被ばく症の状態で帰港するや、大問題になります。ところが第五福竜丸の他にも急性被ばく症状こそありませんが政府調査でも 700 隻余りのマグロ漁船がこの年に被ばくしていました。総人数で 1 万人近くの乗組員になります。高知県の室戸や土佐清水周辺にはマグロ漁船船員が多かったのです。この方達の一部が、福島原発事故が起きて数年後、国に対する賠償訴訟などを通して声を上げるようになりました。“我が友・原子力”で描いたのは、なぜ 60 年以上経って声を上げ始めたのか、被ばくの自覚と健康状態、そして今なにを思っているかです。上映会場は、原告の漁師さんや亡くなった漁師さんの遺族、支援者をはじめ多くの方々で満席となり NHK 高知、高知新聞の取材も入り、黒潮町で上映を開始した意味を噛みしめたのでした。

◆高知・黒潮町にて

高知空港から黒潮町までは道のり 120km、車で 1 時間半は悠にかかります。支援者の方お二人に車で送り迎えをしていただきました。山間の有料道路を 1 時間ほど走ると海に出ます。海岸線に沿って車で 30 分、黒潮町に着きます。ここから先の四万十市、宿毛市、土佐清水市の 3 地点を結ぶ半島状の地域と突端の足摺岬。太平洋に洗われる海岸線は勇壮な岸壁、人を寄せ付けない岩場、ところどこに青い砂浜、多様で美しい海と背後には里山が点在し、日本の原風景と私は勝手に思っています。海辺に立って夕焼けの海景色を見ていると、この海の彼方に世界がひらけている、海の向こうに出て行こうという感情が湧いてくるのです。幕末から維新にかけて数多くの多彩な人材を輩出した土佐という土地柄、その海がもつ紛れもない引力に、嫌でも想像力が刺激されます。“海道”と言ったら良いのかもしれません。南洋マグロ魚でマーシャル諸島へ出ていくのも、カツオ漁を通して紀伊の港や南相馬の漁師と交流があることも土佐には海の道があるからだと知らせてくれます。

“我が友・原子力”は、5 つの章からなり、時代ごとに放射能の人体影響で犠牲となった人々の視線で構成されます。どの章にも当局の被ばくの矮小化と隠蔽が、共

通してありますが、ビキニ水爆実験の被災漁師さんたちの事例は、規模、時間の経過の長さ、巻き込まれた時期と政治的タイミングが、この国の今日の民主主義のありさまを物語るのです。ビキニ水爆実験による被ばくを、66 年後のいま語る意義は大きく２つあります。一つは戦後政治史の転換期の歴史として改めて掘り起こし、明確に刻むべき出来事ということ。もう一つは 66 年前の記録（公文書）が現代の官僚の手で消されること。いわば民主主義の否定を眼前にしているからです。

1954 年 3 月 1 日の水爆実験とマグロ漁船の被ばくは、暮らしの上ではマグロ市場の放射能汚染の恐怖となって騒がれ、反核運動の盛り上がりとなり翌年の 8 月 6 日広島での第 1 回原水爆禁止世界大会開催につながります。しかし皮肉にも 54 年 3 月 2 日は、衆議院予算委員会で改進党の中曽根康弘議員から“原子炉に関する基礎調査費及び研究助成金”予算案が提出され、2 日後に採択されます。原子力導入への口火を切る日となり翌年 6 月の日米原子力協定仮調印につながります。つまり第五福竜丸被ばく事件と日本初の原子力予算成立が同時期であり、反原水爆禁止運動と原子力導入が並行して 1 年間盛り上がりを見せるのです。核と原子力の区別、二元論（平和のための原子力）が効いています。この間の政権は講和条約と日米安保体制を固めた第 5 次吉田内閣から、公職追放組が復帰した第 1 次鳩山内閣を経て、保守合同の自民 55 年体制が出来上る時期に相当します。のちに保守本流と称される“戦後処理内閣”から“戦前回帰内閣”への移行過程で、原子力は導入された。この意味は、今日の原子力政策と考え合わせもっと語られるべきだと思っています。

ビキニ被ばく問題に政治決着をつけたのは、鳩山内閣の副首相兼外相の重光葵でした。54 年暮れ重光外相は米国政府に 2 つの要求を出します。日本全国の漁協に見舞金として配る 200 万ドルと戦争犯罪容疑者の早期解放です。水爆による放射能汚染マグロの廃棄は、漁師の怒りを買い補償問題が浮上していました。その怒りをなだめるための資金でした。戦犯容疑者の釈放は、反米運動に繋がるのを抑えこみ親米協調に世論を誘導するためという名目です。重光が駐日大使を通じて国務省に送った機密メッセージは、2014 年に米国公文書館で明らかになりました。僅かな見舞金で漁師の沈黙を買い、騒ぐと将来マグロ漁ができなくなると脅し黙らせたのでした。要するに日米間の政治決着という形が、万人単位の漁業者を沈黙に導いたのです。

しかし放射能の人体影響は年月の経過とともに症状が現れます。1980 年代になる

とあちらでもこちらでもと癌を患う漁師、亡くなる漁師の数が目立ってきます。なにかおかしいぞ、という声に応えたのが宿毛市の高校で社会科教師をしていた山下正寿さんでした。漁師や遺族との出会いを重ね、54 年当時マグロ漁船でビキニ海域に出た人たちの聞き書きを蓄積していきました。高校生達も課外授業として聞き書きに協力しました。その証言をまとめると、54 年にマーシャル・ビキニ海域から戻った漁船とマグロは、例外なく国の放射能検査を受け、マグロは廃棄、乗組員もケースバイケースで放射線測定や血液検査を受けていたことがわかります。所管は厚生省、水産庁です。公文書が物証となり、被害の全容と実態が明らかになるかもしれない。米国が引き起こした問題であり、外務省にも米国との外交文書があるはずと、行政文書に眼を向けます。こうして地元の人たち主体の実態調査は、公文書探しへと第二段階に入ります。すでに半世紀近い時が経っていました。

映画には、水産庁が 2015 年に開示した文書を山下元教諭が、一枚一枚めくる場面があります。フランスの上映では観客からため息が漏れ聞こえてきたシーンです。95 ページもの分厚い文書、その全ページが各行丁寧に黒く塗りつぶされ判読はゼロといってよい状態で、情報開示と称し官庁から出てきたものです（写真参照)。黒塗りで消されているのは、政府から見舞金として現金が渡った先の全国各地の漁業協同組合名と漁船名および各担当者名です。撮影の下見で事前にうかがった時、この無惨な資料集を見て感じたのは、この黒塗り公文書が今日の日本の民主主義の衰弱した姿そのものではないかということでした。

森友学園の国有地払い下げ問題の追及過程で明らかになった公文書の改竄。ここまでくるともう犯罪です。現に、罪の意識の重圧で自害に至る犠牲者まで出ています。犠牲者であるその官吏の妻は、背景にある真実を求め訴訟を起こしています。高知のビキニ核実験の被災者は、自分の血液検査結果や放射線被ばく量を示す当時の記録を開示させるためにエネルギーを費やさねばなりません。66 年前の記録を現代の官吏が黒く塗りつぶしたり、所在を隠したりする根拠はどこにもありません。公文書の黒塗り、改竄、隠蔽は国家の自殺行為です。ところがあまりに多発しているので、公文書が黒塗りで出てくることに麻痺感覚が働き、諦めの気分が蔓延したらおしまいです。高知の被災者と支援の人たちは、国を相手に賠償訴訟を 2015 年

に起こしました。初の地裁判決を不服とし、現在高松高裁で控訴審が進行中です。66 年前の被ばくと現在の病（癌）との因果関係を裏付けるために国を訴えざるを得ない現実。証拠になりうる国の資料を国が隠すからです。国家とは何か、民主主義とは何かを裁判は問うているのだと思います。

映画は、第 5 章を“怒りの訴訟”とタイトルをつけ、ビキニ被災者の国家賠償訴訟、福島の子ども脱被ばく裁判、福島県在住の甲状腺がんの男女若者と両親、福島原発告訴団で構成しています。被災者、犠牲者の立場に立って考えること、裁判に訴えることが民主主義の回復につながる。訴訟にはそうした大きな意味があるという観点からです。黒潮町を巡回上映の初日にしたのは、この裁判を映画の上映という形で支援する一助になればと考えてのことでした。結果は予想以上の反響でよかったと思いました。機会があれば高知県内の上映機会はこれからも探っていきたいと考えています。

那須塩原の上映はもう一本の“核の大地～プルトニウム物語”だったので、那須塩原のみなさんが、まだご覧になっていない“我が友・原子力”の中身と、高知での上映の意味をあえて踏み込んで書いてみました。

◆大阪城近く

翌日 10 月 18 日の日曜日は、大阪城近く 500 席もあるドーンセンターという会場でした。映画上映後には、小出裕章さんの講演「再処理工場の大事故は防げるのか」があります。1 時間前にはすでに大勢の人が行列していました。小出さんの引力はすごいなと改めて思いました。このコロナ禍で映画だけでは 400 近い入場者は望めなかったと思います。福島原発以後の小出さんの仕事に勇気づけられ、原子力の世界への認識を深めるための基礎知識と物の見方の助けを授かったのは私も皆さんと同じです。同席でき本当に光栄でした。この日の上映とはなりませんでしたが、“核の大地・プルトニウム物語”には、小出さんのインタビューも少なからず取り入れている上、日米仏の再処理工場の話なので、講演「再処理工場の大事故は防げるのか」は、“核の大地”と組み合わせたらぴったりくると思いながら拝聴しました。来年この組み合わせが、どこか

で実現できたらと願っています。終了後、主催の方々との懇親会の席で、次回は那須塩原ですね、と挨拶を交わし小出さんと別れました。

◆伊勢神宮にて

10 月 19 日月曜日は大阪から津市への移動日です。午前中移動し、午後は伊勢市の伊勢神宮に行くことにしました。10 年前にフランスで、“天皇と軍隊”というタイトルの日本の戦後史を作り、日本国内でも劇場上映になりました。簡単にいうと、天皇の免責と国体護持のために、日本政府は憲法 9 条を呑んだという話でした。当然、天皇制と国家神道への関心は強いのですが伊勢神宮を訪れた経験はありません。いい機会と思い立ったのです。伊勢に降り立つと、上映の主催者のひとり柴原洋一さんとお仲間が出迎えてくれました。柴原さんは自主隔離のあいだに一読くださいと、“原発の断り方～ぼくの芦浜闘争記”という著書を送ってくださっていたので、中部電力の芦浜原発計画とこの地の長く粘り強い反対運動ついては、知識として頭に入れていました。それもまた伊勢神宮への更なる興味をそそりました。

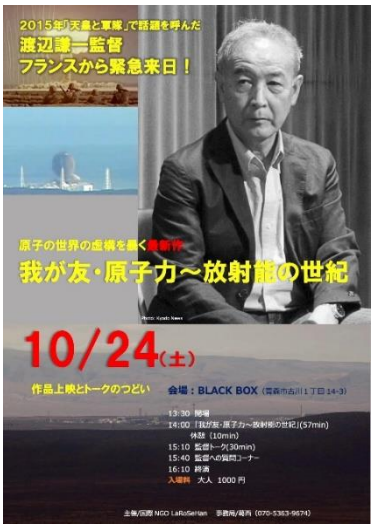
個人的興味は、なぜこの地に皇室神道の祖神が祀られているのだろう。この一つの問いに対して、地勢・地理的に何か感じとって帰れればと思っていました。内宮に流れる五十鈴川に沿って裏山を奥へ奥へと峠近くまで車を走らせ、下山してからは、内宮を見学し、そのあと志摩の海へとご案内いただき十分に感覚的充電ができました。おや、と違和感を感じたのは、神宮参拝客に若人の姿が多いこと、しかも神道式の礼拝を皆ちゃんと心得、それに則って参拝しています。バスを 10 数台連ね修学旅行で来ている高校生もたくさんいました。歴史的遺構の見学者の立場である私には、教育の一環で参拝させることの意義を考えさせられました。

◆三重県・津市にて

津市の上映会は駅前のアストホールで 90 名限定で 2 回行いました。芦浜の運動は、地元住民を刺激し、意識を高める効果を残したに違いありません。会場の空気には確かな熱気を感じました。夜の上映にはわざわざ奈良から高橋博子さん（奈良大学教授）

が来られ、10 年ぶりに（2011 年制作放送の“ヒロシマの黒い太陽”という長編に協力をいただいている）ゆっくりお話ができたのも思いがけない喜びでした。ビキニの被ばく被害の政治決着を提案した 1954 年暮れの重光外相の極秘メッセージを、米国公文書館で 2014 年に見出し公にしたのは、高橋さんの仕事でした。今回も大事なポイントで資料をお借りしたのでした。

福島▲



青森▶

ドキュメンタリーの上映を介して、人と人の出会いがあり、議論があり、議論の輪が広がるなら作者としてこれに勝る喜びはありません。

津市のあと、東京でメディア向けの試写会を、翌日には青森市へ飛び、那須塩原市、福島市と巡回しましたがどこでも活気ある質疑応答と終映後の熱気には、やってみてよかったと思うことしきりでした。さらに主催を引き受けてくれた NPO のスタッフとの懇親会の語らいは、言わずもがなです。上映会を機に来てくださった出演者の方々や旧知のお世話になった方々との再会も喜びでした。

◆那須塩原にて

写真は小菅博史さん撮影

那須塩原では 40 年前に、“女性史の誕生―高群逸枝”という番組作りのため、鎌倉のお宅へ伺った堀場清子さんが来場され驚き、かつお元気な姿を拝見できたのは感動でした。堀場さんのご推薦を受け、水俣の石牟礼道子さんや橋本静子さん（橋本憲三の妹）とともに仕事をした想いが蘇りました。こうした再会と出会いは、とりわけ福島で多く、作品を持って歩くことの功徳がこんなところにもあるんだとは、発見でした。2 本の映画は、来年春の劇場公開に向けて配給の会社が準備を進めています。首尾よく作品が多くの方の眼に触れて欲しいと思いますが、今回のような巡回上映、自分の手で持ち歩く方法も続けていきたいと思ってい

ます。しかも次回は大学篇として、若人の中に分け入っていければと野心を持っています。青森市では上映後のトークの中でその話をすると、その場で大学の先生のご紹介を受けたこともありました。これもまた上映会ならではのダイレクトな出会いと繋がりです。

津市でのトークを、NPO スタッフの方が書き起こし送ってきました。全文は「原発おことわり三重の会」の会報掲載の予定ですが、そこから抜粋して纏めとさせていただきます。ただしこれが結論ではなく質疑応答の一部です。

Q：海外から見て、日本の原子力の見え方はどうですか？

A：日本の原子力については、もう一本（映画「核の大地」）作っていて、核燃サイクルの再処理の話を日米仏の関係で描いたものですが、アメリカでの原子力の位置とフランスの現状と日本の再処理の現状がはっきりと位置づけがわかるように作っています。次の機会にご覧頂きたいなと思います。日本の原子力の現状は、外国から見た場合、やっぱりわけがわからない。チェルノブイリ級の大きな事故を経験して 10 年経っても、溶けた燃料がどこにあるかもわからない。時が経つほど汚染する。こういう徹底的に原子力にやられちゃった国の中で、再稼働を進めたり、原子力発電所を輸出したりなど、訳がわからない。疑問しかでてこない。コロナ禍が通過した後で、日本の原子力、世界の原子力の現状は、若い人たちによって、環境問題や地球環境問題などと同様、必ず政治問題化すると思います。若い世代の大きな政治的カードになってくる。

原子力が一国の選択であったとしても、もはや国民・国家で解決できる領域を出てしまっている。脱原発という声は大事だけど、その国の中で議論することは大事だけれども、その国だけ、日本だけでは脱原発はできなくて、地球規模で連帯して繋いで、地球環境問題であるという流れを作らないと、ほんとの意味では難しい。特に核があるので難しい困難な道だけども、「核＝原子力問題」「これは地球環境問題だ」ということを自分としては表現していく。そういう方向の映画制作をしていきたいと思っています。

Q：日本の官僚も原発を作ったところで高くつくのはわかっているのに、なぜやめないのか。

A：もう一つの「核の大地」という映画の中で、小出裕章さんがずばりと言っています。「日本が原発をやめられないのは、原子力の技術を持つということが抑止力、つまり戦略的・軍事的な考え方で、原子力を動かす技術と能力をもつことが、対周辺国への抑止力になる（と考えているから）。将来的には核武装をするということを常に可能性として持っていることが、日本の原子力導入の動機でもあるので原子力はやめない」と。核武装と原子力発電は、別のもののようなイメージ、核は悪いけど、原子力ならいいんだというキャンペーンをしてきました。実際、原子力の技術者は、広島や長崎から育った若者が原子力関係の研究に入るという、統計的にもそうだし、小出さんも当時そうでした。原子力を平和的に利用するということで、ヒロシマ・ナガサキで犠牲になった人たちへの、弔いになるというか、日本全体が、原子力を決して軍事には使わないという約束の中で、平和利用ということで始めたが、開けてみると平和利用にしても、原子炉を動かすということは、核爆弾を作った材料を生み出すために原子炉は生まれてくるわけですから、リスクは同じで、誤魔化しがきかなくなってきました。チェルノブイリとかフクシマ事故が起きてしまった。原子炉というのは原爆材料を作るために考案された技術であり、それを電気に使うというのは、二次利用です。生み出したアメリカとしてはコントロールできると思っていて、原子力を輸出しても IAEA などのコントロール機関をきちんとしてれば、原爆にはつながらないとしていましたが、結局はイスラエルも、インドもパキストンも原爆を作った。みんな電気をつくるために原子力を導入して、最終的には原爆を持つ。日本はさすがに原爆を作ろうとは言えないけど、作れるぞというポーズは持っていたい。だからやめられない。自民党は最初からその考え方だし、原子力技術は核武装と紙一重だということ、そういう技術を持っていることが防衛技術だという考え方、そこを外さない限り原子力をやめることはできないのだと思います。（了）

2020/11/23　　渡辺謙一

忘却に抗する　小出　裕章（元京都大学原子炉実験所助教）

この秋、フランス在住の映画監督渡辺謙一さんの日本での巡回映画上映に３カ所でお供した。上映されたのは「核の大地～プルトニウム物語（２０１５年)」と「我が友・原子力～放射能の世紀（２０２０年)」の２本であった。

「核の大地～プルトニウム物語」では、米国、フランス、そして日本の六ヶ所再処理工場の歴史が淡々と追われる。再処理工場は原爆材料・プルトニウムを分離し取り出すための工場であり、最高度の軍事工場である。米国のそれは、米国の北西に位置するワシントン州ハンフォードのコロンビア川沿いに作られた。渡辺さんのカメラは、コロンビア川沿いの広大な荒野を映し出す。知識がなければ、そこはただの荒野にしか見えない。しかし、実はそこに長崎原爆の材料を作り出し、取りだした巨大な原子炉と再処理工場があったのである。その工場はすでに解体され、地中に埋められた。

「我が友・原子力」では、放射能による被曝の歴史が追われる。その中には、米国によるビキニ島での水爆実験による漁船の被曝問題もある。静岡県の焼津を母港とする第五福竜丸が大量の死の灰を浴び、日本での原水爆禁止運動に繋がった。しかし、実際には、第五福竜丸だけではなく高知県の漁船を含め１０００隻もの漁船が被曝していたのであった。しかし、米国の属国である日本は、その事実をずっと隠してきた。最近になってようやくに事実として知られるようになったが、日本の国は当時の文書を秘匿する。被曝した人たちが公文書の公開を求めても、国は真っ黒に墨消しした文書しか出さない。

被害者の歴史、社会的に弱い立場の人たちの歴史は、常に消されてしまう。それを許さないためには、長く苦しい闘いが必要になる。渡辺さんの闘いはその一つであり、今回ご一緒できたことを光栄に思う。

▼那須塩原の集いに参加した「信濃毎日新聞」東條勝洋論説委員による１１月４日付一面「コラム」

斜面

2020.11.4

荒野、半島の先端、そして半島の付け根。カメラは都市を離れ自然に囲まれた日米仏３地域の人々を追う。核兵器の原料となるプルトニウムの工場を抱えた地域だ。インタビューの端々に、広大な景観とは対照的な重苦しい空気が漂う◆フランス在住の映画監督渡辺謙一さんが来日し、核問題のドキュメンタリーを巡回上映している。先日、栃木県で上映会があり「核の大地　プルトニウム物語」を見た。長崎の原爆に使われたプルトニウムを生んだ米西部ハンフォードから物語は始まる◆冷戦時代を通じ軍事目的に大量供給した工場は、１９８９年に稼働を止めた。周辺環境が放射能に汚染され、深刻な健康被害が生じていると訴える住民たちがいる。一方、除染と廃炉が基幹産業として地域の雇用を支えている現実。「騒ぐと町が止まる」とのコメントが印象的だ◆原発の使用済み燃料を加工してプルトニウムを取り出す工場を半島の先端に造ったフランス。「言い争いになる」と多くを語らぬ人がいる。日本の場面では、青森県六ケ所村が「出稼ぎの村」からの脱却を目指して同様の工場を誘致した経緯が語られる◆日本の目的は兵器ではなく燃料としての再利用だ。だがその国策は既に破綻した。使い道のない核物質が増えていく。軍事利用と平和利用は完全に切り離せるのか。渡辺さんは「二元論では済まない」と訴えていた。巨大な技術が地域にもたらす影響とともに、考えるべき重い問いである。

一般社団法人「被曝と健康研究プロジェクト」役員

顧問
有馬理恵 劇団俳優座女優
石塚健 医師
沢田昭二 名古屋大学名誉教授、理論物理、内部被曝研究者
曽根のぶひと 九州工業大学名誉教授
玉田文子 医師
西尾正道 北海道がんセンター名誉院長
本行忠志 大阪大学医学系研究科教授
益川敏英 ノーベル物理学賞受賞、名古屋大学特別教授・素粒子研究機構長、京都大学名誉教授
松崎道幸 北海道旭川北医院院長
矢ケ崎克馬 琉球大学名誉教授

代表理事 田代真人 ジャーナリスト
理事 浅野真理、住田ふじえ
監事 三宅 敏文

「ご寄付」や「LETER」購読（年 5000 円）希望の方は同封の振替用紙をお使いください。

◆「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください。

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト 代表　田代真人
〒325-0302 栃木県那須町高久丙４０７－９９７☎0287-76-3601
Ｅメール：masa03to@gmail.com

山下正寿さんが「高知県文化賞」を受賞

喜びの山下正寿さん

高知県の文化向上に功労のあった個人や団体を表彰する高知県文化賞の本年度受賞者に、ビキニ平和活動家で元高知高教組委員長・山下正寿さん（75 歳）が選ばれました。

山下さんは、1983 年に生徒の自主活動組織「幡多高校生ゼミナール」を結成。生徒と共に身近な現代史の掘り起こしを始め、その活動は４０年近くたった今も続いています。その中で大きな注目を集めたのが８５年。地域の人たちの体験を聞き取る中で、米国のビキニ水爆実験による被ばく漁船員が、県内外に多数いる可能性が分かったことです。

その後も、新資料の掘り起こしや船員・家族からの聞き取りを重ね、2012 年には「調査だけでなく救済が必要」との思いで太平洋核被災支援センターを立ち上げました。県内の元船員らによる国家賠償訴訟などを支援し、「具体的な救済方法」を求めて活動を続けています。

山下さんは、1993 年から 1996 年まで高教組委員長を務め、その間「情報公開制度」という新たな手法を活用し、県教委の「閉鎖的で前近代的」な体質にメスを入れ、橋本知事主導の「土佐の教育改革」をスタートさせました。委員長退任後に赴任した宿毛高校大月分校では、早速「開かれた学校づくり推進員会」を活かした学校改革を進め、全国の注目を集めました。1999 年に退職された後は、旧校舎を活用した宿泊施設「四万十楽舎」を立ち上げ、同施設は今も環境・文化センターとして全国から多くの観光客を受け容れています。

表彰式は 2020 年 11 月 3 日に高知会館で行われました。

〈山下さんの言葉〉

３７年間、約４００名近い高校生が参加した幡多高校生ゼミナール、３５年間、ビキニ核被災船員の 調査・救済を継続してきた高知県ビキニ被災調査団や太平洋核被災支援センターの活動などが評価された受賞であることを、皆さんと共有したいと思います。核兵器禁止条約発効が確定し、国際的市民ネッ トワークの力で、世界の平和を築く時代の幕開けを告げました。高知の被災船員・遺族の救済に向けた 活動も核実験被災者支援の先進例として注目され、国際連帯をめざし１歩踏み出す時を迎えました。 また文化賞受賞は、私が生涯テーマとした「教育と地域の連携」を求め、休廃校舎を利用した自然体験型施設「四万十樂舎」「黒潮実感センター」や地域学をそだてる「幡多アカデミー」、「幡多学講座」「幡多もやい塾」など今までの歩みを見つめなおし、成果を整理する機会をいただいたと感じています。 よく高知では「竜馬のように」という言葉が使われますが、青年の選挙投票率の低さなど、まだ高知らしい社会参加する青年の成長に「地域の教育力」が生かされていないと思います。青年たちが、のびのびと学び、はつらつと意見表明し、社会参加する時代を創るため、地域文化の交流を続けたいと思い ます。長い間のご支援に感謝し、新たな峰をめざす歩みにご参加を、よろしくお願いします。

県文化賞受賞に対してビキニ被災船員・遺族、幡多ゼミ OB,太平洋核被災支援センターの仲間や元同僚などたくさんの方から、お祝いの言葉をいただきました。ありがとうございました。

何より、市民が国際的ネットワークの力で、世界の平和を築く時代の幕開けを告げたことを祝いたいと思います。青年たちが、のびのびと学び、社会参加される時代を迎えるために、ともに力を尽くしましょう。

山下正寿